一　次の文章は、二〇〇〇年に刊行された、齋藤純一『公共性』の一節である。これを読んで、後の問いに答えよ。

日本の社会で「公共性」という言葉が人口に膾炙するようになったのはそう前のことではない。つい二〇年ほど前までは、「公共性」という言葉は多くの人にとって否定的な響きをもっていたのではないかと思う。「公共性」は官製用語の一つであり、それが語られるコンテクストもごくかぎられていた。それは、鉄道、道路、発電所、港湾などの建設を推し進めようとする政府が、「公共事業」に異議申し立てを唱える人びとを説き伏せるための言葉、あるいは、生命・生活の破壊を訴える権利主張を「公共の福祉」の名の下に退け、人びとに「ジュニン」を強いる裁判官の言葉だった。いずれにしても「公共性」は、公式的な「公共性」が専有する言語であり、「国家の公共性」をも問題化しうる可能性を宿した批判的な言語としてはまだ定着していなかった。「滅私奉公」の国家イデオロギーがそう遠い過去のものではなかった時期に、国家の行政活動を正当化するマジック・ワードに疑念と不信がいだかれるのは当然のことだろう。

「公共性」という言葉が立場を異にするさまざまな論者によって肯定的な意味でしかも活発に用いられるようになってきたのは、一九九〇年代を迎える頃からである。この言葉が肯定的な意味合いを獲得するようになったコンテクストの一つは、国家が「公共性」を独占する事態への批判的認識の拡がりである。すでに六〇年代末以降、公共事業を含む政府の「公共政策」には、それが惹き起こす自然環境や生活環境の破壊に対して、住民運動あるいは市民運動という形をとった抗議が提起されてきた。国家活動の「公共性」に対するそうした批判的な問題意識は、バブル崩壊後に国家の財政破綻の事実が露わになるにつれ、広く一般に共有されるようになる。エコロジカルな意識のシントウも与って、公共事業の公益性は疑問に付され、むしろそれは、官僚の組織防衛のために、職業政治家による「集票マシーン」への利益誘導のために喰いものにされてきたのではないかという疑念がもたれるようになる。九〇年代には他方で、ボランティア団体、ＮＰＯ（非営利組織）、ＮＧＯ（非政府組織）など市民によって自発的に形成されるアソシエーション[*1]にも注目が集まるようになり、国家と市場社会（market society）の双方から区別される市民社会（civil society）の独自の意義が強調されるようになった。

こうした動きを、「市民的公共性」の生成という仕方で要約するならば、それは、長らく民間の次元に自発的な公共性――「つながりとしての公」――が育たないと批判され続けてきた政治文化にとっては、たしかに歓迎すべき事態ではある。「市民的公共性」は、九〇年代後半の各地の住民投票に見られるように、「公共性」(公益性)を定義する権利を国家の独占から奪還し始めている。国家がその「公共性」の定義を一方的に押しつけることは、たしかに困難になりつつある。しかし、他方で公共的空間における十分な議論を経るべき重大な争点について、政府与党の意思が「市民社会」によるさほどの抵抗を受けることもなく通ってしまった事態をどのように見るべきだろうか(ここでは、九九年に周辺事態法、住民基本台帳法、通信傍受法、国旗・国歌法、出入国管理法の改定、団体規制法といった一連の法制化がおこなわれたことを念頭においている)。この点で、「市民的公共性」の政治的関心は、少なくともいまのところ、そうした争点にはあまり感応しない仕方で編成されているのではないか、という疑問ももたざるをえない。

一九九〇年代には、人びとの間の次元に公共性が形成されるようになる一方で、そうした水平的次元の公共性をあからさまに蔑視する別種の「公共性」論が台頭してきた。それは、「公共性」をナショナリズムによって再び定義しようとする思潮である。その基本的な特徴は、「公共性」を共同体の延長においてもっぱら「国民共同体」と解する点にある。それはこう主張する。「公共性」は、戦後社会において個人主義や私生活主義の野放図な進展によって破壊をヨギ(い)なくされてきた。「公共性」の空洞化に対抗するためには、「祖国のために死ぬ」覚悟を核心に含んだ市民＝公民としての徳性が、国家の教導によって積極的に涵養(かんよう)されねばならない。「私民」から「公民」への脱皮をはかることがこの国民共同体の課題である、と。

この立場にたつ論者は、しばしば、一九八〇年代に主に英米に現われた共同体主義(コミュニテリアニズム)[*2]の用語をエンヨウ(う)する。たとえば「市民的徳性」(civic virtue)はその一つだが、注意が必要である。というのは、共同体主義はたしかに共同体の成員が共有すべき「共通善(コモン・グッド)」を積極的に定義しようとするが、共同体主義のいう共同体はあくまでも非国家的な共同体である(リベラルな国家は「余所者(よそもの)どうしの共同体」にすぎないということがこの立場によるリベラリズム批判のポイントの一つである)。したがって、共同体主義は諸々(もろもろ)の共同体をユニットとする多文化主義を積極的に擁護する。しかし、このことは国民共同体の再統合を主張する

立場には当てはまらない。この立場のいう「市民的徳性」は端的に「国民道徳」を指している。それはまた、国民が私益や私権の主張を超えて「公共の事柄」(res publica)に関心をもつべきことを強調するが、その「公共の事柄」の内実とはもっぱら国家の安全保障や公共の秩序の防衛を指している。この立場は「共和主義」[*3リパブリカニズム]を自称することもあるが、正確にネオ・ナショナリズム(もしくは新保守主義)とよばれるべきだろう(テッサ・モーリス＝鈴木が指摘するように国民を至高の共同体として語るネオ・ナショナリズムのレトリックはグローバルな拡がりをもっている)[*4]。

公共性を人びとの間を超えた次元に「国民的なもの」として位置づけるこの思潮は、「公共性」(公益)を国益と同一視し、グローバリゼーションの条件のもとで日本が国際競争＝「経済戦争」に勝ち抜くことを求める経済的なナショナリズムとも親和的な関係にある。グローバリズムにはナショナリズムの再興をもって対抗せよ、という基本スタンスが共有されるわけである。

近年の「公共性」をめぐる言説のなかには、このように、公共性とは異なる価値、公共性とはまったく相容(あい)れない価値を声高に語るものも少なくない。「公共性」という言葉をいたずらな混乱のなかに陥れ、それを無意味なものとしてしまわないためには、ある程度の形式的なスクリーニングは避けられない。公共性がどのようなものではないかを明らかにするという仕方で、公共性の条件とは何かを明らかにしていこう。

公共性と共同体にはどのような違いがあるのだろうか。まず指摘できるのは、共同体が閉じた領域をつくるのに対して、公共性は誰もがアクセスしうる空間であるという点である。公共性はドイツ語では"Öffentlichkeit"と表現されるが、その語源は「開かれている」という意味の"offen"である。オープンであること、閉域をもたないことが公共性の条件である。この条件は「外」を形象化することによって「内」を形象化する共同体には欠けている。

第二に、公共性は、共同体のように等質な価値に充たされた空間ではない。共同体は、宗教的価値であれ道徳的・文化的価値であれ、共同体の統合にとって本質的とされる価値を成員が共有することを求める。これに対して、公共性の条件は、人びとのいだく価値が互いに異質なものであるということである。公共性は、複数の価値や意見の〈間〉に生成する空間であり、逆にそうした〈間〉が失われるところに公共性は成立しない。

第三に、共同体では、その成員が内面にいだく情念(愛国心・同胞愛・愛社精神等々)が統合のメディアになるとすれば、公共性においては、それは、人びとの間にある事柄、人びとの間に生起する出来事への関心(interest)――interestは"inter-esse"(間に在る)を語源とする――である。公共性のコミュニケーションはそうした共通の関心事をめぐっておこなわれる。公共性は、何らかのアイデンティティが制覇する空間ではなく、差異を条件とする言説の空間である。

最後に、アイデンティティ(同一性)の空間ではない公共性は、共同体のように一元的・排他的な帰属(belonging)を求めない。公共的なものへのケンシン㋒、公共的なものへの忠誠といった言葉は明白な語義矛盾である。公共性の空間においては、人びとは複数の集団や組織に多元的にかかわること(affiliations)が可能である。かりに「アイデンティティ」という言葉をつかうなら、この空間におけるアイデンティティは多義的であり、自己のアイデンティティがただ一つの集合的アイデンティティによって構成され、定義されることはない。

このように公共性は、同化／排除の機制を不可欠とする共同体ではない。それは、価値の複数性を条件とし、共通の世界にそれぞれの仕方で関心をいだく人びとの間に生成する言説の空間である。

それでは、公共性は市場や国家とはどのように異なるだろうか。ごく手短に要点のみを述べよう。

市場は、共同体のように閉域をつくるわけではない。それはまた、集合的アイデンティティへの排他的同一化を要求するわけでもなく、特定の誰かを排除するわけでもない。市場はむしろ、ある人びと(現下の労働市場に適合する能力をもつ者)に共同体的㋑コウソクからの退出を可能にする自由の空間でもある。にもかかわらず、市場は公共性の空間ではない。第一に、市場のメディアは貨幣であり、それは価値の間の質的な差異に対してあくまでもニュートラルである。市場における人びとの行動を制御するのは同一の価値であり、そこでは同一の価値の量的なタカ㋓のみが妥当する。第二に、市場は、ごく一部の例外(文化財市場など)を除けば非人称の空間である。言葉の交換と商品・貨幣の売買との決定的な違いは、前者においては、誰がその言葉を語ったかという人称性が意味をもつということにある。

公共性は人びとの差異を中和化する市場ではないが、それと国家との違いはどこにあるだろうか。まず、国家を国民の共同体

の意味に解するかぎり、公共性と国民国家との相違はすでに明らかだろう。検討が必要なのは、民主的な法治国家という意味での国家についてである。民主的な法治国家というのは、公共性において形成される人びとの意思を正統性の唯一の源泉とする国家である。この場合、公共性は法治国家の組織原理としてそのなかに組み込まれているという見方もできる。しかし、国家が強制力をもって実現すべき価値を解釈し定義するのは、国家ではなく公共性である。この点は、集合的意思決定をおこなう議会を国家の機関と見なすか、それとも公共性の一次元として位置づけるかという問題にも触れるが、いずれにしても、国家は公共性のある限定された次元を担うにすぎず、そのすべてを包含するわけではない。言説の空間としての公共性にはそもそも国境は存在せず、そこでの言論のテーマも狭義の政治的意思形成・決定には還元されえない。

（齋藤純一『公共性』による）

注　＊1　アソシエーション＝集団。組織。　＊2　共同体主義（コミュニタリアニズム）＝共同体（コミュニティ）の価値を重んじる政治思想。　＊3　共和主義（リパブリカニズム）＝「公共性」を重視し、権利や自由を強く主張すると同時に、義務に対しても重きを置く政治思想。　＊4　テッサ・モーリス＝鈴木＝オーストラリアの歴史学者。（一九五一～　）

問1　太線部㋐「シントウ」、㋑「コウソク」を漢字に改めよ。

問2　「公共性」という言葉について、筆者はどのように述べているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　「滅私奉公」の国家イデオロギーがそう遠い過去のものではなかった時期に、国家の行政活動を正当化するマジック・ワードに疑念と不信がいだかれていたため、国家が「公共性」という言葉を独占する事態への批判的認識が拡がっていった、と述べている。

b　「公共性」という言葉は、かつては、政府に異議申し立てを唱える人びとを説き伏せるための言葉、あるいは、生命・生活の破壊を訴える権利主張を退け、人びとに「ジュニン」を強いる使用者のかぎられた言葉であったが、広く一般に用いられるようになったことで、批判的な言語として定着した、と述べている。

c　六〇年代末以降、公共事業を含む政府の「公共政策」には、それが惹き起こす自然環境や生活環境の破壊に対して、住民運動あるいは市民運動という形をとった抗議が提起されてきたため、「公共性」という言葉は多くの人にとって否定的な響きをもっていた、と述べている。

d　官製用語の一つである「公共性」という言葉は、バブル崩壊後に国家の財政破綻の事実が露わになるにつれ、広く一般に共有されるようになり、立場を異にするさまざまな論者によって肯定的な意味でしかも活発に用いられるようになった、と述べている。

e　国家が「公共性」を独占する事態への批判的認識が拡がったことによって、一九九〇年代を迎える頃から、「公共性」という言葉は、「国家の公共性」をも問題化しうる可能性を宿した批判的な言語として、肯定的な意味合いを獲得するようになった、と述べている。

問3 「市民的公共性」について、筆者はどのように述べているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 国家と市場社会の双方から区別される市民社会によって生成される「市民的公共性」は、「公共性」(公益性)を定義する権利を国家の独占から奪還し始めているものの、「つながりとしての公」が育たなかったために、政府与党の意思がさほどの抵抗を受けることもなく通ってしまうという事態を招いてしまっている、と述べている。

b 市民によって自発的に形成されるアソシエーションにも注目が集まるようになり、国家と市場社会の双方から区別される市民社会の独自の意義が強調されるようになったが、「市民的公共性」の政治的関心は、十分な議論を経るべき重大な争点にあまり感応しない仕方で編成されているのではないか、という疑問ももたざるをえない、と述べている。

c 長らく民間の次元に自発的な公共性が育たないと批判され続けてきた政治文化にあって、九〇年代後半の各地の住民投票に見られるように、「公共性」(公益性)を定義する権利を国家の独占から奪還し始めている現状は、国家がその「市民的公共性」の定義を一方的に押しつけることが困難になりつつある点で、大いに歓迎すべき事態である、と述べている。

d 公共的空間における十分な議論を経るべき重大な争点について、政府与党の意思がさほどの抵抗を受けることもなく通ってしまった事態は、長らく民間の次元に自発的な「市民的公共性」が育たなかったことによるものであるため、少なくとも今のところ「公共性」(公益性)を定義する権利を国家の独占から奪還しているとは認めがたい、と述べている。

e 公共的空間における十分な議論を経るべき重大な争点について、政府与党の意思がさほどの抵抗を受けることもなく通ってしまった事態は、「市民的公共性」が国家と市場社会の双方から区別される市民社会の独自の意義を強調したことが原因であると考えられ、市民によって自発的に形成されるアソシエーションには疑問をもたざるをえない、と述べている。

問4 「公共性」をナショナリズムによって再び定義しようとする思潮と、共同体主義との関わりについて、筆者はどのように述べているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　「公共性」をナショナリズムによって再び定義しようとする思潮は、共同体主義の用語をエンヨウしながら、「公共性」を共同体の延長において「国民共同体」と解し、その共同体の成員が共有すべき「共通善」を積極的に定義しようとするが、共同体主義のいう共同体はあくまでも非国家的なものであり、諸々の共同体をユニットとする多文化主義を積極的に擁護するものである、と述べている。

b　「公共性」をナショナリズムによって再び定義しようとする思潮は、共同体主義の用語をエンヨウしながら、「公共性」の空洞化に対抗するためには、「祖国のために死ぬ」覚悟を核心に含んだ市民＝公民としての徳性が、国家の教導によって積極的に涵養されねばならないと説くが、共同体主義は「余所者どうしの共同体」にすぎない国民共同体の再統合を主張する立場にある、と述べている。

c　「公共性」をナショナリズムによって再び定義しようとする思潮は、共同体主義の用語をエンヨウしながら、戦後社会において個人主義や私生活主義の野放図な進展によって破壊をヨギなくされてきた水平的次元にある「公共性」を、「私民」から「公民」への脱皮をはかることで回復させようとするが、共同体主義は諸々の共同体をユニットとする多文化主義を積極的に擁護するものである、と述べている。

d　「公共性」をナショナリズムによって再び定義しようとする思潮は、正確にネオ・ナショナリズム（もしくは新保守主義）とよばれるべきであり、「公共性」（公益）を国益と同一視し、グローバリゼーションの条件のもとで日本が国際競争＝「経済戦争」に勝ち抜くことを求める経済的なナショナリズムと親和的であるが、共同体主義は国民が私益や私権の主張を超えて「公共の事柄」に関心をもつべきことを強調するものである、と述べている。

e　「公共性」をナショナリズムによって再び定義しようとする思潮は、正確にネオ・ナショナリズム（もしくは新保守主義）とよばれるべきであり、「公共性」（公益）を国益と同一視し、グローバリゼーションの条件のもとで日本が国際競争＝「経済戦争」に勝ち抜くことを求める経済的なナショナリズムと親和的であるが、共同体主義においては国家の安全保障や公共の秩序の防衛が優先される、と述べている。

問5　公共性について、筆者はどのような言説の空間であると述べているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　公共性は、等質な価値に充たされておらず、オープンであり、人びとの間にある事柄、人びとの間に生起する出来事への共通の関心事をめぐってコミュニケーションがおこなわれ、多義的なアイデンティティを共有できる人びとのみによって、構成・定義される言説の空間である、と述べている。

b　公共性は、複数の集団や組織に多元的にかかわることが可能であり、価値の複数性や差異を条件とし、共同体が必須とする同化／排除の機制を不可欠とせず、「内」を形象化することによって「外」が形象化されるような、誰もがアクセスしうる言説の空間である、と述べている。

c　公共性は、複数の価値や意見の〈間〉に生成し、何らかのアイデンティティが制覇することや一元的・排他的な帰属が求められることがなく、共通の世界にそれぞれの仕方で関心をいだく人びとの間で生成される、閉域をもたない言説の空間である、と述べている。

d　公共性は、人びとのいだく価値が互いに異質であり、成員が内面にいだく情念が統合のメディアとなっておらず、コミュニケーションが人びとの間に生起する共通の関心事をめぐっておこなわれ、複数の集団や組織に多元的にかかわることを不可欠とする、閉域をもたない言説の空間である、と述べている。

e　公共性は、共通の世界に帰属した人びとによって、複数の価値や意見が互いに異質であることが本質的に共有されており、自己のアイデンティティがただ一つの集合的アイデンティティによって構成・定義されることがない、誰もがアクセスしうる言説の空間である、と述べている。

問6　市場と公共性と共同体との関係について、筆者はどのように述べているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　市場は公共性の空間でもあり、また共同体の性質をも持つ。市場は、集合的アイデンティティへの排他的同一化を要求するわけではないが、市場のメディアである貨幣については、質的な差異がニュートラルであるという点で、ただ一つの集合的アイデンティティが制覇する空間となり、公共性とは異なる。また、市場は、非人称の空間であるのに対し、公共性においては、誰がその言葉を語ったかという人称性が意味をもつという点に決定的な違いがある。

b　市場は公共性の空間ではないが、共同体の性質を持つ。市場は、集合的アイデンティティへの排他的同一化を要求するわけではないが、市場のメディアである貨幣については、質的な差異がニュートラルであるという点で、ただ一つの集合的アイデンティティが制覇する空間となり、共同体的であると言える。また、市場は、非人称の空間であるのに対し、公共性においては、誰がその言葉を語ったかという人称性が意味をもつという点に決定的な違いがある。

c　市場は公共性の空間ではないが、共同体の性質を持つ。市場は、集合的アイデンティティへの排他的同一化を要求するわけではないが、市場のメディアである貨幣は、同一の価値として存在し、その量的なタカが問題になるという点で、人びとのいだく価値が互いに異質なものである公共性とは異なる。また、市場は、非人称の空間であるのに対し、公共性においては、誰がその言葉を語ったかという人称性が意味をもつという点に決定的な違いがある。

d　市場は公共性の空間ではなく、共同体とも異なる性質を持つ。市場は、集合的アイデンティティへの排他的同一化を要求するわけではないが、市場のメディアである貨幣は、同一の価値の量的なタカが問題になるという点で、人びとのいだく価値が互いに異質なものである公共性とは異なる。また、市場は、非人称の空間であるのに対し、公共性においては、誰がその言葉を語ったかという人称性が意味をもつという点に決定的な違いがある。

e　市場は公共性の空間ではなく、共同体とも異なる性質を持つ。市場は、集合的アイデンティティへの排他的同一化を要求するわけではないが、市場のメディアである貨幣については、質的な差異がニュートラルであるという点で、ただ一つの集合的アイデンティティが制覇する空間となり、公共性とは異なる性質となる。また、市場は、非人称の空間であるのに対し、公共性においては、誰がその言葉を語ったかという人称性が意味をもつという点に決定的な違いがある。

問7　二重傍線部あいうえおのカタカナと同じ漢字を用いる語を選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

あ　ジュニン

a　特命大使に全権をイニンする。
b　やむを得ないこととしてモクニンする。
c　恐ろしいほどザンニンな事件が起きる。
d　怒ってばかりいるとニンソウが悪くなる。
e　結婚した妹のカイニンを祝う。

い　ヨギ

a　形式ばったギレイはやめることにする。
b　資金調達のためのベンギを得る。
c　大臣の問題発言がブツギをかもす。
d　痛ましい事件を聞いてギフンを覚える。
e　ジギに類する愚かな空想にふける。

う　エンヨウ

a　田園地帯のエンセンの風景に心がなごむ。
b　交渉がエンカツに運ぶよう気を配る。
c　小さな発見がキエンとなって大きな発見を生む。
d　返却期限を過ぎるとエンタイ料金がかかる。
e　困っている人をシエンする活動を行う。

㋓ ケンシン

a 地域開発について知事にケンサクする。
b 教育的なケンチに立って意見を述べる。
c ケンキョな態度で人に接する。
d 会議でオンケンな主張が支持される。
e 事件の容疑者がケンキョされる。

㋔ タカ

a 私はカブンにして地球外生命体については知らない。
b 物事にカジョウに反応する。
c 責任の重い仕事には精神的なフカがかかる。
d 将来にカコンを残さないように事にあたる。
e 夜間の利用には特別料金がカサンされる。

問8 公共性と国家との違いについて、筆者はどのように述べているか。五十字以内で記せ。なお、句読点・符号も字数に含めるものとする。

二　次の文章は、『狭衣物語』の一節である。飛鳥井の女君は早くに両親を亡くし、乳母を頼りに暮らしていたが、乳母も生計が苦しく困窮していた。女君のもとには狭衣の君が通うようになり、女君は身ごもった。その頃、女君に心を寄せていた、狭衣の君の乳母子である大夫は、父（本文では「大弐」）が筑紫へ赴任するのに同行することになり、女君を妻として伴いたいと思った。大夫は女君の乳母と画策し、女君を欺いて筑紫行きの船に乗せてしまう。大夫は船中で女君に結婚を迫り、女君は乳母に欺かれたことを知って落胆した。これを読んで、後の問いに答えよ。

船には、日頃の積もるままに、心地もまことにあるかなきかになりゆくを、かくて死なば、むなしき骸を、これが見扱はんも、ねたく口惜しきを、ただ、いかで、海に落ち入りなん、と思ひて、さるべき隙々を求むるに、人目のみしげくて、日頃になりゆく。この大夫、*1衣の関を恨みわぶれど、同じさまにのみ言へば、さすがになさけだつ人にて、弱げなるさまを心苦しうて、近うも寄らぬなりけり。

かかるほどに、大弐のもとに、やんごとなき人の、なべての女房にはあらぬがありけるを、心にかけて語らひ歩きけり。宵過ぐるままに見えぬを、うれしと思ふに、かかることを聞きて、乳母は、安からず、腹だたしきに、君のかく臥し入りたまへればぞかし、例のやうにおはせましかば、かかることもなからまし、と思ひ立てば、いとど心憂くおぼえたまへば、「已が身をとざまかうざまに責めたまふよ。かかる人の、物いたう思ふは、忌むなるものを。平らかにして命あらば、忘れがたう思すらん人にも逢ひたまひてん。いとかく心幼き人や、世にははべる」など、言ひ聞かすれど、ただ、この大夫が見えぬ折々の出できたりけるを、思ふこと、かなひぬべきなめり、とうれしきより外のことなし。いで、あはれ、ただあるにまかせてもみで、あながちにかくもてなして、かう憂きめを見すればぞかし、いかなるありさまにて長らへんとすらん、とさすがに悲しうおぼえたまへば、いとど音をのみ泣きて、答へもしたまはねば、うちむつかりて立ちぬるままに、髪もたげて見わたすに、人々も寝たるさまなれば、うれしとは世の常ならず思ひながら、さは、今宵や限りなるらん、と思はんには、Ⓐつらからん人だに思ひ出でられぬべし。まして、我や忘るる、人や訪はぬ、と思ひしは、をこなりけり、と思ひ続け、立ちぬれば、涙の海に身はやがて動かれで、つく

づくと沖の方を見やれば、空はつゆの浮雲もなく、月さやかに澄みわたりたるに、海の面も、来し方行く末見えず、はるばると見わたされて、寄せ返る波ばかり見えわたりつつ、船のはるかに漕ぎ行くが、いと心細き声にて、「虫明の瀬戸へ来よ」[*2]と歌ふが、いとあはれなれば、

流れても逢ふ瀬ありやと身を投げて虫明の瀬戸に待ちこころみむ

寄せ返す沖の白波たよりあらば逢ふ瀬をそこと告げもしてまし

とて、顔に袖押し当てて、とみに動かれぬほどに、人や見つけん、と静心なければ、わななくわななく単袴ばかりを着て、髪かきこしなどするに、[*3]ありし御扇の枕上なりけるが、手にさはりたるに、心騒ぎて取りつつ見るに、涙に曇りて、はかばかしうも見えぬを、墨のつやばかり見えて、ただ今書きたるやうなるに、面影さへふと思ひ出でられたまひて、この世にはまた、見たてまつるまじきぞかし、ただ今、かくなりぬとも、知りたまはで、いづくに、いかにしておはすらん、寝やしたまひぬらん、さりとも寝覚めには、おのづから思し出づらんと、いみじき心惑ひにも、硯[*4]をせがいに取り出でつつ、この扇に物書かんとするに、目も涙にくれ、手もわななかるれど、

早き瀬のそこの水屑になりにきと扇の風よ吹きも伝へよ

とも言ひ果てず、人のけはひのすれば、落ち入りなんとて、海の底をのぞく。ただ、かばかりにてだにも、いと恐ろしきに、わななくわななくうつ伏したまふめりとぞ。

（『狭衣物語』による）

注　＊1　衣の関＝「直路とも頼まざらなむ身に近き衣の関もありといふなり」（後撰集）による。男女の性的な関係を持たないことのたとえ。

＊2　虫明の瀬戸＝今の岡山県瀬戸内市邑久町付近の狭い海峡。　＊3　ありし御扇＝これより前の場面で、狭衣の君愛用の扇を大夫が賜っていて、それを女君に見せて置いていったもの。狭衣の君の流麗な筆跡が記されていた。　＊4　せがい＝船の両側の舷に渡した板。

問1　船に乗せられた女君のようすとして、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　こうして私が船中で死んだなら、自分の遺体を、大夫たちが始末することになるのも、悔しくて残念だから、どうにかして海に身を投げて死んでしまいたいと思い、入水（じゅすい）する適当な機会をうかがっていた。

b　こうして私が船中で死んだなら、自分の遺体を、大夫たちが始末することになるのも、避けがたくて残念だから、どうにかして海に飛び込んで逃れたいと思い、脱出する適当な機会をうかがっていた。

c　こうして私が船中で死んだなら、自分の遺体を、狭衣の君が見て取り乱すことになるのも、悔しくて残念だから、どうにかして海に飛び込んで逃れたいと思い、脱出する適当な機会をうかがっていた。

d　こうして私は船中で死んでしまうので、自分の遺体を、大夫たちが始末することになるのも、避けがたくて残念だから、どうにかして海に身を投げて死んでしまいたいと思い、入水する適当な機会をうかがっていた。

e　こうして私は船中で死んでしまうので、自分の遺体を、狭衣の君が見て取り乱すことになるのも、悔しくて残念だから、どうにかして海に飛び込んで逃れたいと思い、脱出する適当な機会をうかがっていた。

問2　大夫のようすはどのようなものだったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　いくら言っても求婚に応じない女君との仲をはがゆく思っているが、情愛あるさまにふるまう人なので、女君が病み衰えているのを申し訳なく思って近寄ることを避けていた。その間に大夫は、大弐のもとにいた、高貴な人が、普通の女房ではないほど風流な女房のところに通っていることを、言いふらしてまわっていた。

b　いくら言っても求婚に応じない女君との仲をはがゆく思っているが、情愛あるさまにふるまう人なので、女君が病み衰えているのを申し訳なく思って近寄ることを避けていた。その間に大夫は、大弐のもとにいた、他とは異なる高貴な家柄の出身の女房のところに通うようになっていた。

c　いくら言っても求婚に応じない女君との仲をはがゆく思っているが、気の弱いところがある人なので、女君が病み衰えているのを申し訳なく思って近寄ることを避けていた。その間に大夫は、大弐のもとにいた、他とは異なる高貴な家柄の出身の女房のところに通うようになっていた。

d　いくら言っても求婚に応じない女君との仲を残念に思ってはいるが、気の弱いところがある人なので、女君が病み衰えているのを気の毒に思って近寄ることを避けていた。その間に大夫は、大弐のもとにいた、高貴な人が、普通の女房ではないほど風流な女房のところに通っていることを、言いふらしてまわっていた。

e　いくら言っても求婚に応じない女君との仲を残念に思ってはいるが、情愛あるさまにふるまう人なので、女君が病み衰えているのを気の毒に思って近寄ることを避けていた。その間に大夫は、大弐のもとにいた、他とは異なる高貴な家柄の出身の女房のところに通うようになっていた。

問3　大夫のようすを見た乳母は、女君にどのように言ったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　乳母は、「私のことをあれこれとお責めになっていますよね。このようにお世話する人を、ひどく困らせることは憚るべきことなのに。無事に出産して生きながらえれば、あなたが忘れがたく思っている人にもまたお逢いになることもきっとあるでしょう。このように純心な人が、この世にいるものなのですね」と言った。

b　乳母は、「私のことをあれこれとお責めになっていますよね。このようにお世話する人を、ひどく困らせることは憚るべきことなのに。無事に筑紫に着いて生きながらえれば、あなたのことを忘れがたく思っている人にもまたお逢いになることもきっとあるでしょう。このように考えの浅い人は、この世にまたといませんよ」と言った。

c　乳母は、「ご自身のことをあれこれとお責めになっていますよね。このような身重の人が、ひどく思い詰めるのは、不吉なことなのに。無事に出産して生きながらえれば、あなたが忘れがたく思っている人にもまたお逢いになることもきっとあるでしょう。このように純心な人が、この世にいるものなのですね」と言った。

d　乳母は、「ご自身のことをあれこれとお責めになっていますよね。このような身重の人が、ひどく思い詰めるのは、憚るべきことなのに。無事に出産して生きながらえれば、あなたが忘れがたく思っている人にもまたお逢いになることもきっとあるでしょう。このように考えの浅い人は、この世にまたといませんよ」と言った。

e　乳母は、「ご自身のことをあれこれとお責めになっていますよね。このような身重の人が、ひどく思い詰めるのは、不吉なことなのに。無事に筑紫に着いて生きながらえれば、あなたのことを忘れがたく思っている人にもまたお逢いになることもきっとあるでしょう。このように考えの浅い人は、この世にまたといませんよ」と言った。

問4　乳母のことばを聞いて、女君はどのように思ったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　女君は、「自然の成り行きに任せていると見せかけて、ひそかに大夫を諭して計画を中止させて、私がこのようなつらい目にあわないように見守ることこそ乳母の役目なのだ。もし私が死んでしまったら、乳母はどのようにして生きていこうと思っているのだろう」と思った。

b　女君は、「自然の成り行きに任せていると見せかけて、強引に私を連れ出して船に乗せて、私をこのようなつらい目にあわせるから乳母は困ったことになるのだ。もし私が死んでしまっても、乳母はどのようにしてでも生きていくことだろう」と思った。

c　女君は、「自然の成り行きに任せておかずに、強引に私を連れ出して船に乗せて、私をこのようなつらい目にあわせるから乳母は困ったことになるのだ。もし私が死んでしまっても、乳母はどのようにしてでも生きていくことだろう」と思った。

d　女君は、「自然の成り行きに任せておかずに、ひそかに大夫を諭して計画を中止させて、私がこのようなつらい目にあわないように見守ることこそ乳母の役目なのだ。もし私が死んでしまったら、乳母はどのようにして生きていこうと思っているのだろう」と思った。

e　女君は、「自然の成り行きに任せておかずに、強引に私を連れ出して船に乗せて、私をこのようなつらい目にあわせるから乳母は困ったことになるのだ。もし私が死んでしまったら、乳母はどのようにして生きていこうと思っているのだろう」と思った。

問5　乳母が立ち去った後の女君について、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　周りをうかがってみると、女房たちも寝入ったようすなので、今夜が最期になるだろうと思いつつ、立ち上がったものの、涙があふれ出て体はそのまま動くこともできず、かろうじて沖の方を見やると、空の浮雲は涙で見えず、月はほのかに澄み照って、はるか沖を漕ぎ行く船から「虫明の瀬戸へおいでなさい」と歌う声が聞こえた。

b　周りをうかがってみると、女房たちも寝入ったようすなので、今夜が最期になるだろうと思いつつ、立ち上がったものの、涙があふれ出て体はそのまま動くこともできず、じっと沖の方を見やると、空には浮雲が一片もなく、月はくっきりと澄みきって、はるか沖を漕ぎ行く船から「虫明の瀬戸へおいでなさい」と歌う声が聞こえた。

c　周りをうかがってみると、女房たちも寝入ったようすなので、今夜が最期になるだろうと思いつつ、立ち上がったものの、涙が流れ落ちる海を見ると体はそのまま動くこともできず、かろうじて沖の方を見やると、空には浮雲が一片もなく、月がくっきりと澄みきって、はるか沖を漕ぎ行く船から「虫明の瀬戸へおいでなさい」と歌う声が聞こえた。

d　周りをうかがってみると、女房たちも寝入ったようすなので、今夜が最期になるだろうと思いつつ、立ち上がったものの、涙が流れ落ちる海を見ると体は次第に動けなくなり、じっと沖の方を見やると、空の浮雲は涙で見えず、月はほのかに澄み照って、はるか沖を漕ぎ行く船から「虫明の瀬戸へおいでなさい」と歌う声が聞こえた。

e　周りをうかがってみると、女房たちも寝入ったようすなので、今夜が最期になるだろうと思いつつ、立ち上がったものの、涙が流れ落ちる海を見ると体は次第に動けなくなり、かろうじて沖の方を見やると、空には浮雲が一片もなく、月はくっきりと澄みきって、はるか沖を漕ぎ行く船から「虫明の瀬戸へおいでなさい」と歌う声が聞こえた。

問6 「寄せ返す沖の白波」の和歌の説明として、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 寄せては返す沖の白波よ、狭衣の君からの手紙があったなら、自分が海に身を投げて海の底のどこそこにいると伝えてほしいと詠み、狭衣の君から手紙が来ないわびしい気持ちを、「白波」が寄せては返す波打ち際のさびしさに重ねて表現している。

b 寄せては返す流れが沖の白波にはあるのだから、自分は身を投げてもどこそこの浅瀬に流れ着くということを、狭衣の君になんとかして伝えたいと詠み、生きながらえて狭衣の君に逢いたい気持ちを、「寄せ返す」「沖」「白波」「瀬」など、海と縁語関係にある語を用いて表現している。

c 寄せては返す沖の白波に、狭衣の君へのつてがあるなら、身を投げた自分が狭衣の君ともういちど逢える場所を海の底のどこそこだと知らせることもできるだろうにと詠み、狭衣の君に何も伝えることもできずに海に身を投げる嘆きを、「其所(そこ)」と「底」の掛詞(かけことば)を用いて表現している。

d 寄せては返す沖の白波のように、狭衣の君の手紙が、船に乗せられる前に何度も届いていたなら、もっと多くの逢う機会があって危機を回避し、このような死に方をしないで済んだろうにと詠み、薄かった愛情への恨みを、「白波」を数多く繰り返すことの比喩として用いて表現している。

e 沖の白波がうち寄せてたどり着く浅瀬に知り合いがあるなら、自分は船の底にいると伝えて、いずれは救出してもらうことができるのにと詠み、叶(かな)うはずもないことなので海に身を投げる絶望を、「まし」という反実仮想の助動詞を用いて表現している。

問7　扇を見つけた時の女君の気持ちはどのようであったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　私が海に身を投げて死のうとしているとも、狭衣の君はごぞんじなく、どこでどうなさっているだろうか、寝ていらっしゃるかもしれないが、寝覚めには自然と私のことを思い出しておられるだろうと、ひどく心乱れた。

b　私が狭衣の君の子を身ごもっているとも、狭衣の君はごぞんじなく、どこでどうなさっているだろうか、寝ていらっしゃるかもしれないが、寝覚めにはきっと私のことを思い出しておられるはずだと、ますます心乱れた。

c　私がこの扇を持って船に乗っているとも、狭衣の君はごぞんじなく、どこでどうなさっているだろうか、寝ていらっしゃるかもしれないが、寝覚めにはきっとこの扇のことを思い出しておられるはずだと、ひどく心乱れた。

d　私が狭衣の君の筆跡を見て泣いているとも、狭衣の君はごぞんじなく、どこでどうなさっているだろうか、寝ていらっしゃるかもしれないが、寝覚めにはご自身でも扇に書いたことばを思い出しておられるだろうと、ひどく心乱れた。

e　私が狭衣の君の面影を思い浮かべて泣いているとも、狭衣の君はごぞんじなく、どこでどうなさっているだろうか、寝ていらっしゃるかもしれないが、寝覚めにはぼんやりと私との逢瀬（おうせ）を思い出しておられるだろうと、ますます心乱れた。

問8　女君が扇に字を書こうとしたときのようすとして、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　「あなたが身を投げて、流れの速い虫明の瀬戸の海底の水屑になったということを、扇の風よ、よく吹いて伝えてくれたことだよ」という歌を、最後までは言い終わらないが、そう歌う狭衣の君のかすかな気配がした。

b　「あなたが身を投げて、流れの速い虫明の瀬戸の海底の水屑になりそうだということを、扇の風よ、よく吹いて伝えてくれたことだよ」という歌を、最後までは言い終わらないが、そう歌う狭衣の君のかすかな気配がした。

c　「あなたも身を投げて、流れの速い虫明の瀬戸の海底の水屑になってほしいということを、扇の風よ、狭衣の君に吹いて伝えておくれ」という歌を、女君が最後まで書き終わらないうちに、誰かがやってくる気配がした。

d　「私が身を投げて、流れの速い虫明の瀬戸の海底の水屑になってしまったということを、扇の風よ、狭衣の君に吹いて伝えておくれ」という歌を、女君が最後まで書き終わらないうちに、誰かがやってくる気配がした。

e　「私が身を投げて、流れの速い虫明の瀬戸の海底の水屑になるだろうということを、扇の風よ、狭衣の君に吹いて伝えておくれ」という歌を、女君が最後まで書き終わらないうちに、誰かがやってくる気配がした。

問9　傍線部Ⓐについて現代語訳せよ。

（以上）